

G.H. ミードの社会的自我論からみる体育授業の機能について —A中学校の実践場面から—

山内 朋也

Function of Physical Education Class Based on G.H.Mead's Social Self Theory. —A Case of “A” Junior High School—

Tomoya YAMAUCHI

I. 緒言

体育では、生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の育成が目指されているが、今日の体育授業の現状は、運動する子どもとそうでない子どもの二極化が問題となっている。このような学習参加の問題には自己と他者の関係がなんらかの影響を及ぼしていると考えられる。(岡田, 1974) これまで体育授業における自己と他者の関係は、細江(1998)らの研究によってその「かかわり」に焦点が当てられ捉えられてきた。しかし、それらの研究ではその中の個人を捉える視点に欠けており、より詳細に自己と他者の関係を捉えるためには、「かかわり」に加え、その中の個人を捉える視点が必要であると考えられる。これは個人という自我の形成を捉えることによって、自己と他者の関係を捉えることができることからいえよう(岡田, 1987)。

以上から本研究では、自我形成という視点から体育授業における自己と他者の関係を捉え直し、そこで明らかになった観点をもとに授業の事例を解釈することによって得られた結果と子どもたちの学習参加との関連を検討することを目的とした。

II. 研究方法

本研究では、まず、自我形成という視点から体育授業を捉え直す。次にそこで明らかになった観点をもとに授業の事例を解釈する。その際、生徒

の内的な事象を捉えるために関与観察によるエピソード記述法を分析の手法とした。関与観察とは、「私」がその場の状況と文脈に入り込み、関与しながら観察することを通して、そこで生じる事象を捉える研究方法である。また、関与観察によって捉えることができた事象は、「私」の問題意識と関連させて描き出し、分析するエピソード記述法を用いた(鯨岡, 2005)。

- ・調査対象：A中学校3年生a, b, c, dの4クラス(1クラス、男子20名、女子20名)
- ・調査内容：A中学校の平成23年4月から10月の間に行われた3年生の授業において、観察者である「私」自身がその状況と文脈のなかに入り込む関与観察を行った。さらに、その授業で実際に起きた事象を授業後にエピソードとして描き出し、その事象にかかわる生徒の内的な相互作用を捉えるエピソード記述を行った。
- ・分析方法：関与観察を通して描き出されたエピソードの中から「シュートを決める」を取り上げ、エピソード記述として描き出された事象を「私」の問題意識と関連させながら解釈を行った。本研究における観察者の問題意識は、「生徒の学習の状況と文脈のなかで、『I』と『me』からなる内的な相互作用を解釈することができるかどうか」である。

III. 結果と考察

本研究における自我概念は、体育授業における自己と他者の具体的な相互作用を捉えるために

G.H.ミードの社会的自我論を用いた。社会的自我論とは、人間の具体的な相互作用から自我の発生を明らかにしたものである。その論から体育授業を捉え直すことによって、次のことが考察された。まず、体育授業の中で生徒たちは運動技能を媒体として他者と相互作用している。このとき運動技能は意味をもち、他者に引き起こすのと同じ反応を自分のなかに引き起こすことで自分に対する他者の態度を取得するのである。この他者の態度や期待の組織化された組み合わせである状況が「me」を形成する。「me」は他者の見地からみた私を表している。その「me」の意味を解釈し、次の行為を決めるのが「I」である。「I」は自分自身を感じる私を表している。そして、この「I」である行為は他者の態度を変容させ新たな状況を生み出し新たな「me」を形成するのである。このように、生徒は「me」と「I」による相互作用を通して他者と関わっていくのである。

以上の考察を用いて、授業の事例を解釈することとした。

「エピソード：シュートを決める」

①背景

9月12日3時限目に行われた、A中学校3年b組のバスケットボールの授業である。本時は、本単元のなかの2時限目にあたる。この単元において私が観察するのは、これがはじめてである。本時の授業構成は、ウォームアップ、チーム練習、作戦タイム、4vs4の試合（3セット）である。緑、青、紫、赤の4チーム（1チーム、10人）に分かれ、試合が行われた。

②エピソード本体

青vs緑の1試合目の中で生徒B（緑女6）はあまりボールに触れることができず、いつもコート中央付近をうろろしているためすぐに目についた。基本的にはボールを目で追っているだけで動いたとしてもボールを持った人に2、3歩近づく程度であり、それを繰り返していた。そのため、生徒Bは自分が何をしようのかかわからず試合に参加できていない様子であった。2試合目においても同様で、この生徒Bはその動きを繰り返していたが、たまたま相手コート左前方のゴールに近い位置にいるときコート右側の仲間からパスを受

けた。一瞬、間が空いたためパスをするように思われたが、両手に持ったボールをゴールに向けてシュートした。シュートは弧を描きリングに触れずそのままゴールに入った。私も思わず「お～ナイッシャー」と声がでるほど見事なシュートであった。生徒Bは自らの初得点に驚きながらも満面の笑みである。周りからも大きな歓声が上がリ、試合が活気づいたように思われた。この瞬間からこの生徒の動きが変わった。ボールを持っている人に常に5、6歩近付いていくため、ボールをもっている人との距離が1m以内になりボールに近くなった。また、こぼれ球をとろうとする姿が見られた。なかなか上手いかず相手に取られてしまったり、再び同じ位置でシュートするも失敗したりするがめげずに続けている。私はその変貌振りに驚きを感じた。その後も相手チームがシュートしたボールがリングに当たってはじかれたときには、そのボールを緑の生徒が取ると生徒Bが前方で待っており、そこにパスが出るという速攻が多く見られるようになった。この試合の後、緑男3に「あれでいい」とほめられたり、緑女2などに「ナイス」と声をかけられたりする場面が見られた。そのときの生徒Bの表情はとても嬉しそうな笑顔であった。授業が終わった後にも、生徒Bは「自分でもびっくりする」と満面の笑みで友だちに話しており、初得点の興奮が冷めていないことがよく伝わってきた。

③メタ観察

学習指導要領によると、バスケットボールはゴール型に分類され攻防による競争が主たる目的とされる種目である。そのため、周りの他者からその目的に関わって他者と相互作用することを期待されているといえる。しかし、生徒Bは最初、その場にいるだけで精一杯であった。それは、その目的のために他者と相互作用することができていない問題の状況といえよう。その後、生徒Bは2試合目に入りシュートを決めるという行為に対して他者からの肯定的なフィードバックがなされるという体験を挟んで、他者に対して主体的に働きかけはじめたのである。

このような生徒Bと他者との相互作用の変化を、内的な相互作用の変化を含んだものとして捉

えることとする。周りからの期待や態度からなる問題的状况は生徒Bの「me」を形成していると解釈される。そして生徒Bはその「me」の意味を解釈し「I」であるシュートという行為を創発したのである。これは、「自分でもびっくりする」という、予測できない「I」の特徴を表した発言からいえる。「I」であるシュートを創発することによって、他者の態度を変容させ、他者と調和的に相互作用できる新たな状況を生み出したといえる。その状況が生徒Bのなかで新たな「me」を形成し、それが機能しはじめたことによって、主体的に他者に働きかけ、試合に参加しはじめたのである。

このように生徒は運動場面における他者の期待や態度からなる状況と文脈に応じた「I」である運動技能を創発することによって他者の態度を変容させ他者との調和的な関係を築ける新たな状況を生み出し、共同体の構成員としての「me」を形成しているのである。つまり、運動技能を創発することによって関係を変化させ学習参加の度合いを深めているといえよう。この場合、運動技能は、状況と文脈を受けて創発される主体性をもった意味のある行為であり、関係を変化させるものであるといえる。

IV. 結論

これまでの考察から、本研究では運動場面の中で状況と文脈に応じて運動技能を創発することができるかが学習参加を決めると結論づけた。今回は、運動教材として球技を取り上げたが、今後、他の運動教材における事例についても検討する必要がある。

〈引用・参考文献〉

- 1) 岡田和雄 (1974) 運動嫌いと体育嫌い. 体育科教育, 22 (4) 大修館書店: 12-14, 14.
- 2) 細江文利 (1999) 子どもの心を開くこれからの体育授業. 大修館書店.
- 3) 岡田敬司 (1987) 自我の教育学のために. 風間書房, pp.1-3.
- 4) 鯨岡峻 (2005) エピソード記述入門—実践と質的研究のために—. 東京大学出版会.

- 5) G.H.ミード (1995) 精神・自我・社会. 河村望. 人間の科学社.

(指導教員 森 勇示)